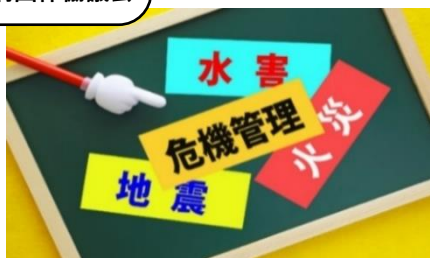


私たちの災害の備えについて



近年、大震災以外にも台風被害や集中豪雨による洪水被害等が多発しかつて「自然災害が少ない」と言われていたここ埼玉県でも、水害等の自然災害による被害が毎年のように発生しています。各障害者団体の災害発生時のための備え、防災や減災への取り組みや、抱えている課題行政や政府・関係機関への要望等、「防災」を大きなテーマとして掲載します。

ROHHAD 症候群 日本事務局 代表 はしもと めぐみ 橋本 恩

私の 11 歳になる息子は、4 歳の時に ROHHAD 症候群と診断され、脳内にある体に指令を出す部分（視床下部）の障害や、呼吸機能の低下を伴う生活を 7 年間送っています。日中は状況により酸素吸入を要し、夜間の睡眠時には常時、酸素吸入と人工呼吸器を装着しています。

昨年、そんな息子が二泊三日の林間学校への参加に挑戦しました。もちろん、人工呼吸器と酸素吸入の為の医療機器を持ち込んでの同行参加です。「林間学校」と名の付くとおり、現地は山林に囲まれた自然豊かな場所ですので、私は万が一の息子の体調急変や、災害への備えも含め、酸素ポンペを日中背負い、息子の挑戦を近くで見守りました。

この経験は、親である私にとっても一つの挑戦となりましたが、一方で学びへと繋がります。それは、もし実際に災害が発生した場合、我が子を守る為には最低限どのような防災の準備をするべきか、を具体的に考えるきっかけとなったのです。

被災時、電力の供給が止まった場合、呼吸管理に必要な医療機器は自動で内蔵バッテリーに切り替わりますが、持続時間には限りがあります。（酸素濃縮器、人工呼吸器、パルスオキシメーター等）酸素ポンペは非常に重く機動力に欠けるため、電力確保が非常に有効である事から私はいくつか対策を考えました。

- ・各医療機器のバッテリー持続時間の把握
- ・数日分の予備バッテリー確保
- ・定期的な充電チェック
- ・車の燃料不足の回避（医療機器の電源確保、シェルターの役割）

これら管理を日常化し、突発的な災害への対応ができるよう準備を行います。



(写真 1) 睡眠時に必要な医療機器と 2 泊分の酸素ポンペ(停電への備え)

暗闇で行う医療行為に明かりは必須です。また、災害時に想定されるリスク対策も同時に備える必要があります。

- ・懐中電灯（酸素ポンペの使用時、ライターやキャンドルなどの火気は引火の危険から使用不可）
- ・乾電池（懐中電灯やパルスオキシメーター用）
- ・カニューレ・医療機器のコネクター等の医療ケア物品（破損・紛失・欠損時の予備）
- ・蘇生バック（体調急変時に使用）
- ・精製水（人工呼吸器の加湿に使用）



(写真 2) 防災医療セット

医療機器メーカーである PHILIPS（フィリップス）は、2020 年、「ANPI」という在宅医療の安否確認システムを導入しました。これは災害発生時に医療機器利用者の通電状況の確認、加えて停電からの経過時間や復旧状況、さらに GPS が内蔵されているので、避難場所に持参する事で避難場所を把握し、円滑に安否確認を行う事が出来ます。また、その後のケアに繋がるとも重要な役割を担っています。

普段は自宅に置いてありますが、災害発生時避難する場合は ANPI も持参します。大規模災害時でライフラインの普及の目途が立たない時、子供の容体、保護者（介護者）の容体、人工呼吸器の状態などをみて、かかりつけの医療機関へ連絡し、搬送します。